24.

閉塞性動脈硬化症と大動脈瘤における頚動脈病変の自然経過

東京医科大学第2外科，同老年科*
○伊藤幹彦，島崎太郎，佐々木司，福島洋行，石丸　新，岩本俊彦*，高崎　優*

【目的】 閉塞性動脈硬化症（ASO）および大動脈瘤（AA）は動脈硬化が原因の場合が多く，頚動脈病変を合併している可能性が高いと考えられ，脳合併症が問題となることがある．そこで，動脈硬化性病変である血管疾患において，頚動脈病変の経時的変化に関して検討した．

【対象と方法】 1994.4–2000.3 間に follow 可能であった ASO 66 例，AA 50 例を対象とした．両側内外頚動脈分岐部を中心に B モード超音波断層撮影を行って，plaque の程度を検討した．

【結果】 ASO における plaque の変化は，初回検査所見正常 49 枝，minor plaque 59 枝，major plaque 24 枝に対し，次回検査所見で，正常なものから著変なし 28 枝，増大 21 枝，minor なものから縮小 5 枝，著変なし 44 枝，増大 10 枝，major なものから縮小 6 枝，著変なし 16 枝，増大 2 枝を認めた．AA における plaque の変化は初回検査にて正常なもの 23 枝，minor plaque 54 枝，major plaque 23 枝に対し，次回検査時所見で正常から著変なし 18 枝，増大 5 枝，minor から縮小 3 枝，著変なし 46 枝，増大 5 枝，major から縮小 3 枝，著変なし 13 枝，増大 7 枝を認めた．ASO にて増大傾向を認めたものが 25%，AAA にて増大傾向を認めたものが17%であった．

【考察】 ASO，AA において，脳合併症が問題となることがあるが，その原因として，頚動脈病変によるものが誘因となることがあると考えられている．両疾患ともに 20%前後の plaque の増大を認めるため脳イベントの有無とともに注意深いフォローが必要であると考えられる．

25.

微少変化型ネフローゼ症候群に対するシクロスポリン療法とリンパ球のシクロスポリン感受性の臨床的意義

（八王子・腎臓科）
○吉田雅治，伊保谷憲子，横山仁美，白矢勝子，斎藤真由美

【目的】 頻回再発型およびステロイド抵抗性難治性微少変化型ネフローゼ症候群（MCNS）に対する，シクロスポリン（CsA）の至適投与法を検討する目的で，リンパ球の薬剤感受性と治療効果の関連について解析した．

【方法】 当科で最近 5 年間に経験した MCNS32 例（男性 20 例, 女性 12 例, 平均年齢 39 歳）を対象に，ステロイドおよびシクロスポリン治療前の MCNS 患者の末梢血よりリンパ球を採取し，リンパ球の CsA 感受性をマイトーゲン試験法により測定した．リンパ球のマイトーゲン（Con-A）応答性増殖を 50%抑制する薬剤濃度を IC_{50} 値とした．CsA は 1 日 2 回経口投与し，投与量は 1.5～3.5 mg/kg/日で，血中トラレベルが 70～150 ng/ml になるように調整した．

【結果】 MCNS 32 例の CsA IC_{50} は，14.2 ± 13.8 ng/ml で性，年齢差は認めず，IC_{50} が 18 ng/ml 以下の高感受性群は 18 ng/ml 以上の低感受性群に比較し，NS が完全寛解するまでの期間が有意に短く（3.8 週：7.1 週，$P < 0.01$），NS の再発率が有意に低値（43%：75%，$P < 0.01$）であった．MCNS の蛋白尿発症の病態に深く関与する糸球体基底膜の陰性荷電の障害に影響を及ぼすと考えられる，リンパ球のインターロイキン-2（IL-2）産生抑制および IL-2R 発現抑制効果と CsA IC_{50} 値は有意の正の相関（$r = 0.806$，0.694，$P < 0.01$）を示した．NS に伴う高コレステロール血症，特に高 LDL 血症と CsA IC50 値は有意の正の相関（$r = 0.810$，$P < 0.01$）を示した．

【結語】 MCNS における CsA 感受性測定は，CsA の抗蛋白尿効果を予測し，CsA の至適投与を行う上で臨床的に有力な指標の一つと考えられた．